

エネルギーとエンテレケイア

——アリストテレスの現実態優先論における目的論の意義——

岩 田 圭 一

1 問題の所在

アリストテレスの哲学における「現実態 (*energeia/entelecheia*)」概念の重要性は解釈者の多くが認めるところである。『自然学』における運動 (*kinēsis*) の問題、『形而上学』における〈実体〉 (*ousia*) の問題、『ニコマコス倫理学』における幸福 (*eudaimonia*) の問題など、さまざまな領域におけるさまざまな問題において、「現実態」概念はきわめて重要な役割を担わされている。このような「現実態」概念それ自体を明確にしようとする試みは、『形而上学』Θ巻、とりわけその第8章と第9章においてなされる。とくに第8章では、現実態は可能態 (*dunamis*) より先であるという現実態優先論が展開され、「現実態」概念の重要な特徴が示されている。しかしその論述は、「より先 (*to proteron*)」という語の多義性や「現実態」という語の適用範囲の広さ¹⁾のゆえに、多様な解釈を許す内容となっている。「より先」に関しては、「実体においてより先」という優先性の一つの、しかもとくに重要な用法について、解釈者たちの見解が一致しておらず、その優先性をどう解釈するかが近年、論争の的になっている²⁾。また「現実態」に関しては、その語の適用範囲の広さに加えて、「エネルギー」と「エンテレケイア」という二つの語が「現実態」として用いられることについてその意味合いの違いが問題になりうる³⁾。本稿では、Θ巻第8章（以下、Θ8）における現実態優先論における目的論の意義を再評価するとともに、「エネルギー」と「エンテレケイア」の

意味合いがどの点で異なり、どの点で共通しているかについて一つの答えを提出することにしたい。以下では、まずΘ 8 冒頭における現実態の優先性の提示を見ることから始めて、アリストテレスが区分する三つの優先性の中から二つの優先性、すなわち時間における優先性と実体における優先性とを順に取り上げ⁴⁾、「エネルゲイア」と「エンテレケイア」について理解を深めていくことにする。

2 現実態の優先性の提示

アリストテレスはΘ 8 の冒頭で、「より先」という語の用法がすでにΔ 卷第11章（以下、Δ11）において区別されていることを理由にして、デュナミスに対するエネルゲイアの優先性を一般的に主張している（1049b4-5）。この理由づけは、Θ 8 における「より先」の用法が、Δ11における「より先」の用法を前提にしていることを示しているように受け取れる。実際、Θ 8 における「より先」の三つの用法、すなわち「説明方式において (*logōi*) より先」、「時間において (*chronōi*) より先」、「実体において (*ousiai*) より先」のすべてが、Δ11においてすでに言及されている⁵⁾。したがってΘ 8 における三つの「より先」はΔ11における当該の「より先」の用法に基づいて理解すればよいように思われる。しかし後で見るように、「実体においてより先」に関しては、Δ11の説明では不十分であることが明らかになる。ともかく三つの優先性がどのように提示されているかを見ておくことにしたい。

アリストテレスはデュナミスに対するエネルゲイアの優先性を提示する際に次のように述べている。

そして私がデュナミスと言っているのは、他のもののうちにある、あるいは他のものとしての限りにおける〔自分自身のうちにある〕変化の原理と言われる、先に規定されたものだけでなく、一般に運動あるいは静止のあらゆる原理もまたそうである。というのは自然も、デュナミスと同じ類の

うちにあるからである。実際それ〔自然〕は運動の原理であるが、他のもののうちにあるのではなく、自分自身としての限りにおける自分自身のうちにある〔原理である〕。(1049b5-10)

ここでアリストテレスは、デュナミスに対するエネルゲイアの優先性における「デュナミス」は「可能態」ではなく「能力」と言っているように見える。「他のものとしての限りにおける〔自分自身のうちにある〕変化の原理」であるデュナミスとは、Θ巻の前半で明らかにされた能動的能力、例えば建築能力などのことである。それだけでなく「一般に運動あるいは静止のあらゆる原理」と言われているのは、能動的能力以外にも受動的能力、抵抗力、そしてすぐ後に挙げられる自然といったデュナミスが念頭に置かれていることを示していると考えられる⁶⁾。優先性が問題になる際の「デュナミス」が能力の意味だとすれば、それに対応する「エネルゲイア」は運動や行為⁷⁾であることになるだろう。それではΘ 8 冒頭に示される優先性は能力に対する運動ないし行為の優先性なのだろうか。確かに、最初に扱われる「説明方式においてより先」の説明では、能力と運動ないし行為に関して後者の優先性が語られている(1049b12-17)。しかし時間と実体における「より先」の説明には、質料とこれから生成したものの例も挙げられている。Θ 8 冒頭における優先性の主張は、限定なしの「より先」であるから、一般的な主張であると解するべきであるが、この場合「エネルゲイア」と「デュナミス」は、広い適用範囲をもつ「現実態」と「可能態」と解さなければならない。この解釈は上の引用に続く次の一節を注意深く読むことによって正当化される。

またエネルゲイアは、そのようなデュナミスの全体 (*pasēs…tēs toiautēs*) より、説明方式においても、実体においても先である。しかし時間においては、或る意味では先であるが、他の意味では先ではない。(1049b10-12)

注意すべき部分は「そのようなデュナミスの全体」である。「そのような」

はもちろん上述の能力や自然としてのデュナミスを指している。しかし *pasēs* は単数形なので、上述の能力や自然の全部というよりは、むしろ *pasēs* が修飾する隠れた名詞「デュナミス」に関してその全体を指していると解することができるだろう。このように解するとき、「そのようなデュナミスの全体」は上述の能力や自然を例とするデュナミスの全体であり、その「デュナミス」は最も広い適用範囲をもつ「可能態」であることになる。つまり能力や自然としてのデュナミスは、「デュナミス」の身近な例として挙げられているにすぎないと解するのである。また「デュナミス」が「可能態」なら、これに対する「エネルゲイア」は「現実態」であることになる。こうして Θ 8 冒頭における優先性の主張は、「エネルゲイア」と「デュナミス」の最も適用範囲の広い用法、すなわち「現実態」と「可能態」に関する一般的な主張であるということが理解されるだろう。

3 時間における優先性

時間におけるエネルゲイアの優先性の説明は、実体における優先性の説明を理解する助けになるので、検討しておくことにする。この時間的優先性については、すでに見た引用 (1049b10-12) に示されていたように、必ずしもエネルゲイアがデュナミスより先であるとは限らない。しかしアリストテレスの関心はエネルゲイアがより先であるようなケースにあり、エネルゲイアの時間的優先性を主張することが主眼となっているように思われる⁸⁾。この優先性の説明は二つ用意されている。一つは「現実態」と「可能態」という広範な用法に基づいた説明であり、もう一つは「現実活動⁹⁾」と「能力」という限定的な用法に基づいた説明、しかも能力の発揮ではなく能力の獲得（学習）の観点から行われる説明である。ここではとくにこれら二つの説明の関係を明らかにしたい。

3-1 現実態の時間的優先性

時間においてより先なのが現実態であるか、それとも可能態であるかは、現
(4)

実的にあるものをどのような観点から見るかにかかっている。アリストテレスは次のように述べている。

種において (*tōi eidei*) 「可能的なものと」 同じである現実的なもの (*to auto energoun*)¹⁰⁾ は「可能的なものよりも時間において」 より先であるが、数において (*arithmōi*) 「可能的なものと 同じである現実的なもの」 は「時間においてより先では」 ない。(1049b18-19)

「種において「可能的なものと」 同じである現実的なもの」とは、例えば胎児(可能的に人間であるもの)と同じ種(人間種)に属する成人(現実的な人間)のことであると考えられる。これに対して「数において「可能的なものと 同じである現実的なもの」」とは、例えば一人の胎児と数的に同一である成人(その胎児の成長体)のことであると考えられる。便宜上、前者を種的観点、後者を数的観点と呼ぶことにする。数的観点においては、胎児のほうが成人より時間的に先であることは明らかである。とはいえ数的観点からの説明を踏まえて種的観点からの説明が行われているので、それらを順に見ていくことにしよう。

すでに現実態において (*kat' energeian*) あるこの人間やこの穀物やこの見るものよりも、「その人間の」質料 (*hulē*) や「その穀物の」種子や「見るものに成る」見うるもののほうが、時間においてより先である。これら「質料、種子、見うるもの」は可能的に人間、穀物、見るものであるが、現実的にはまだ「人間、穀物、見るものでは」ない。(1049b19-23)

可能的に人間である質料(例えば胎児)は、現実的にはまだ人間ではないので、現実的に人間であるもの(その胎児の成長体)のほうが時間的に後にくるのだと言われている。この引用の中では「見るもの」と「見うるもの」について若干問題がある。仮にこの「見るもの」を目覚めている人間、「見うるもの」を眠っている人間とすると、見うるものが見るものより時間的に先であるとは必

ずしも言えなくなる。というのも、眠っている人間とこの眠りから目覚めた人間とを比べれば見うるもののほうが時間的に先であるが、この眠っている人間は、眠る前、起きているときに、すでに見ていたのであり、見るものであったからである。そうすると数的観点においても、現実的にあるもの（見るもの）のほうが可能的にあるもの（見うるもの）より時間的に先であることになり、上の引用の主張と合わなくなる。この困難は、Burnyeat et al. が指摘したように、「見うるもの」を胎児の目と解することによって回避されるだろう¹¹⁾。ここでの「見る」が、光を感じる程度のことではなく、外界の事物を或る程度はっきり見ることを意味するのだとすれば、胎児の目は現に見ていないので、現実的に見るものではないと言える¹²⁾。彼が外界の事物を或る程度はっきり見ることができるようになるのは、生後しかるべき時間が経ってからである。この時間の経過後、彼は初めて現に見るのであり、現実的に見るものとなる。この場合は明らかに、見うるもの（胎児の目）のほうが現実的に見るもの（生後一定の時間を経過した目）よりも時間的に先である。「見うるもの」の解釈にはこうした注意が必要であるが、それ以外の点ではとくに問題なく数的観点における可能的なものの——したがってデュナミスの¹³⁾——時間的優先性を理解することができるだろう。

次に種的観点からの説明であるが、この説明は、Z 巻第 7 章と Θ 8 に示された生成の図式への言及によって次のように説明されている。

しかしながらそれら〔質料、種子、見うるもの〕よりも、現実的にあるもう一方のものども——これら〔生みの親にあたる現実的な人間、穀物、見るもの¹⁴⁾〕からあれら〔質料、種子、見うるもの〕が生成したのだが——のほうが、時間においてより先である。というのも現実的にあるもの〔生成してくるもの〕は常に、可能的にあるものから、現実的にあるもの〔生みの親〕によって生成するからである。例えば人間は人間によって、教養ある者は教養ある者によって〔生成する〕、なぜなら或る第一の動かすものが常にあるからである。そして動かすものはすでに現実的にある。そし

て実体に関する説明の中で、生成するものはすべて、或るものから、或るものに、或るものによって成るのであり、これ〔最後の「或るもの」〕は種において〔生成してくるものと〕同じものであるということが述べられた。(1049b23-29)

ここでアリストテレスは、生まれたものに加えて生みの親も「現実的にあるもの」とみなされうることに目を向けている。このことは種的観点かどのような観点であるかを教えてくれる。もし生まれたものが存在する時点にアリストテレスの視点があるのだとしたら、生みの親は必ずしも現実的にあるものであるとは言えないだろう。生んだ後ですぐに死んだとしたら、それは現実的にあったものではあっても、現実的にあるものではない。またもし生みの親が存在する時点にアリストテレスの視点があるのだとしたら、生まれたもの——むしろ生まれるものと言ったほうがよいが——はまだ存在しないので、現実的にあるものとはみなされないだろう。しかしアリストテレスはそうした一時点に視点を置いているのではなく、生みの親も生まれたものとともに「現実的にあるもの」とみなしうるような視点に立っているのだと考えられる。その視点とは、生成という現象を図式的に捉える生成論のそれである。だからこそアリストテレスは、生みの親も生まれたものも現実的にあるものであることを示したすぐ後で生成の図式に言及したのではないだろうか。もちろんこのような視点はそれほど特殊なものではない。われわれは出来事の時間的先後関係を考えるとき、各出来事を並べて眺める視点に立っている。生成論の視点と言ったのはそのような視点にほかならない。アリストテレスはそうした視点から、生みの親と生まれたものの両方を「現実的にあるもの」とみなしているのだと言える。

上の引用では、生みの親としての現実的にあるものが、可能的にあるもの(子)よりも時間的に先であるという仕方で、現実的にあるものの——したがって現実態の¹⁵⁾——時間的優先性が説明されている。アリストテレスは数的観点では主張できなかった現実態の時間的優先性を、種的観点あるいは生成論の観点¹⁶⁾に移ることによって主張したのである。

3-2 現実活動の時間的優先性

アリストテレスは現実態の時間的優先性の説明に続けて、現実活動としてのエネルゲイアの時間的優先性の説明を行っている。この説明では、能力の発揮としての現実活動ではなく、能力の獲得における現実活動が問題にされている。能力の発揮は言うまでもなく能力を前提しており、時間において能力がその発揮より先であることは明らかである。それでもアリストテレスは現実活動の時間的優先性を主張可能なものと考え、そのために能力の獲得の話を取り上げるのである。この優先性の説明は以下のように始まっている。

それゆえ¹⁷⁾また、一度も建築したことのない者が建築家であり、一度もキタラを弾いたことのない者がキタラ奏者であることは、不可能であるように思われる。というのもキタラを弾くことを学ぶ者は、キタラを弾くことによって、キタラを弾くことを学ぶからである。そして他の学ぶ者たちも同様である。(1049b29-32)

アリストテレスに倣ってキタラを弾くことを例に考えてみよう。キタラを弾くという現実活動¹⁸⁾は、キタラを弾く能力のあるものがその能力を行使することによって起こるのだから、その現実活動はキタラを弾きうる者より時間的に後であるように思われる。3-1で取り上げた見うるものの例を思い起こそう。数的観点においては、見うるもの（胎児の目）は見るもの（生後の目）に時間的に先立つが、種的観点においては、見るもの（その胎児の生みの親）が見うるものに時間的に先立つ、とわれわれは理解した。キタラの場合も同様に説明できるだろうか。まず数的観点であるが、キタラを弾きうる者はキタラを弾く者に時間的に先立つと言えるだろうか。これに対しては、必ずしもそうではないと言わざるをえない。見うるものは見る能力をもっていながら一度も見たことがないために、見るものより時間的に先であると言えた。しかしキタラを弾きうる者が、一度もキタラを弾いたことがないということがありうるだろうか。キタラを弾きうるかどうかの判定基準はキタラを実際に弾くことである。或る

人がキタラを弾きうるとしたら、その人はすでにキタラを弾いたことがあるのでなければならない。そうすると、見うるものの場合とは異なり、数的観点において、キタラを弾きうる者はキタラを弾く者より時間的に先ではないことになるだろう。実はすでにここに、アリストテレスが能力の獲得の話を取り上げたことの原因が示唆されている。或る人がキタラを弾きうる者であるならその人はすでにキタラを弾いたことのある者だという、数的観点からの説明のうちには、その人がキタラを弾くことを学んだ人だという認識が含まれている。アリストテレスはこの点に着目して、「それゆえまた」というように、上の引用部分を始めたのだと考えられる¹⁹⁾。種的観点に移行することによって、キタラを弾く者はキタラを弾きうる者より時間的に先である、と説明するのではなく、数的観点にとどまったまま、能力の獲得の話に移行することによって、キタラを弾く者——厳密にはキタラを弾く者の現実活動——がキタラを弾きうる者より時間的に先であることを示そうとするのである。

それでは具体的に、能力の獲得における現実活動の時間的優先性の説明を見ていこう。「キタラを弾くことを学ぶ者は、キタラを弾くことによって、キタラを弾くことを学ぶ」というのは、キタラを弾く能力の獲得には当の能力に対応する現実活動（キタラを弾くこと）の試験的な行使が時間的に先立っていないということである。この現実活動はあくまでも試験的な行使であって、能力獲得後における十全な意味での行使とは区別される。この違いを考慮に入れないで、能力の獲得における現実活動の時間的優先性が不合理であることを示そうとするソフィスト的論駁があるが、これに対してアリストテレスは次のように述べている。

しかし生成しているものの或る部分は生成してしまっていなければならない、一般に運動しているものの或る部分は運動してしまっていなければならないので…〔中略〕…、学んでいる者もおそらく〔当の〕知識の或る部分をもっていなければならないことになるだろう。(1049b35-1050a2)

先ほど、キタラを弾く能力を獲得するのに先立ってその能力を試験的に行使すると述べたが、この行使を可能にする能力は、上の引用によるなら、完全な能力ではなく能力の一部ということになる。自転車に乗る能力の獲得を例にして考えてみよう。われわれは不完全な仕方で自転車に乗ることを繰り返して、つまり練習して、完全な仕方で自転車に乗る能力を獲得したはずである。そして上の引用によるなら、不完全な仕方で自転車に乗るときにはすでに能力の一部を獲得している。具体的に言えば、サドルに座った状態で体のバランスをとる能力やハンドルを適切に操作する能力は身につけていないが、ペダルをこぐ能力は獲得しているといったことが考えられるだろう。この状態ではおそらく、少しは前に進むとしてもすぐに転倒することだろう。そこで、教えてくれる親兄弟や友人に支えてもらいながら乗ったり、補助ペダルをつけて転倒しにくくして乗ったりして、自転車に乗る能力を少しずつ身につけていくことになる。このように不完全な仕方で自転車に乗るという現実活動が、自転車に完全な仕方に乗る能力より時間的に先であるということを、アリストテレスは語っているのだと考えられる。こうして現実活動の時間的優先性が示されたことになる。

4 実体における優先性

現実態の時間的優先性の説明は、生みの親も生まれたものも現実的にあるとみなす、完全な意味での生成論の観点²⁰⁾に立った説明と、能力の獲得の話に移行して不完全な仕方での現実活動に言及する説明から成っていた。これらの説明を踏まえて、実体における優先性の説明を見ていくことにする。

実体における優先性の説明は大きく二つに分かれている。一つは感覚的世界の出来事にあてはまる説明である。説明方式における優先性も時間的優先性も、感覚的世界の出来事を例にして説明されている。その流れでまず感覚的世界の出来事に関して実体的優先性²¹⁾の説明が行われる。もう一つは永遠的なものと消滅的なものについて言われる説明である。この説明において用いられる「実体においてより先」は、最初の説明において用いられる「実体においてより先」

よりも「いっそう厳密な意味で」(1050b6) 用いられている。「実体においてより先」の厳密な用法とは、 $\Delta 11$ に見られる用法、すなわち存在論的優位性を示す用法であると考えられる²²⁾。実際アリストテレスは、永遠的なもの（常に現実的にあるもの）が消滅的なもの（存在することもしないことも可能なもの）より実体において先であることを示す説明の中で、永遠的なものは消滅的なものなしに存在できるが、消滅的なものは永遠的なものなしに存在できないことを示唆している（1050b19）。永遠的なものと消滅的なものに関する説明における「実体においてより先」の用法がこのようなものであることは、一般に認められたことである。問題は、実体的優先性の最初の説明における用法である。C. Witt と S. Makin は、最初の説明における「実体においてより先」の用法も $\Delta 11$ と同じ存在論的優位性を示すものだと解釈している²³⁾。しかし一般的には、最初の説明における用法は存在論的優位性とは異なるものだと理解される。そしてこのように理解するからこそ、第二の説明の頭に付された「いっそう厳密な意味で」という語も意味を——すなわちここから $\Delta 11$ で規定しておいた用法の始まりであるという意味を——もってくるのだと言える。ここでは実体的優先性の最初の説明を取り上げ、一般的解釈を支持する解釈を提示することにしたい。その中で一般的解釈に対する Witt の反論にも応えることにする。

4-1 現実態の実体的優先性(1)——十全性の観点から

現実態の実体的優先性に関する最初の説明は二つに分けることができる。アリストテレスは第一の説明として、現実的にあるものが実体として十全なものであることに言及している。

なぜならまず第一に²⁴⁾、生成においてより後であるものどもは形相においては、あるいは実体においては (*tōi eidei kai tēi ousiai*) [生成においてより先であるものども、すなわち可能的にあるものども] より先だからである（例えば成人は子供より [先であり]、人間は種子より [先である]）。というのも一方は形相をすでに [十全な仕方] で持っているが、他方は

〔十全な仕方で〕もっていないからである。(1050a4-7)

この説明は、「実体においてより先」というのが「時間においてより先」とは対照的であることをよく示している。というのも実体においては、時間的に後にくるものが時間的に前にあるものより先であると説明されているからである。例として挙げられている成人と子供、および人間と種子はそれぞれ、数的に同一のものと考えられる。時間的には子供が先で、その成長体は後であるが、実体においてはそれが逆転するのである。その理由としてアリストテレスは、形相の有無を挙げている。しかし子供も或る程度は人間の形相をもっていると考えられるので、上の引用の訳文に示したように、十全な仕方でもっているか否かが問題にされているのだと解するべきだろう。同一物の未完成体と完成体とを比べれば、それが本来もつ機能の点で完成体のほうが未完成体より重要であることは明らかである。このことをアリストテレスは、「実体においてより先」という言い回しによって表しているのだと考えられる。もしもここでの「実体においてより先」がΔ11に示された用法と同じであるとしたら、成人は子供なしに存在できるが、子供は成人なしに存在できないと言わなければならないが、これは奇妙な言い方である²⁵⁾。その子供と成人は数的に同一であるのだから、その成人は子供（成長途中の自分自身）なしには存在できない。またその子供が成長の途上で亡くなったとした場合、その子供の成長体は存在することはないが、その子供は存在していた。つまりその子供はその成長体なしに存在していたのである。いずれにせよ、上の引用に挙げられている例を尊重する限り、ここでの「実体においてより先」の用法をΔ11におけるそれと同一視することはできないと行うことができるだろう。

しかしアリストテレスはなぜ、完成体の優先性を示すのに「実体において」という限定をつけたのだろうか。成人は実体において子供より先であるという例で考えてみよう。「実体において」というのは限定の与格で、例えば「ソクラテスは身体において強い（ソクラテスは身体が強い）」と同様の働きをするものと考えられる。「ソクラテスは強い」というのを「身体において」と限定

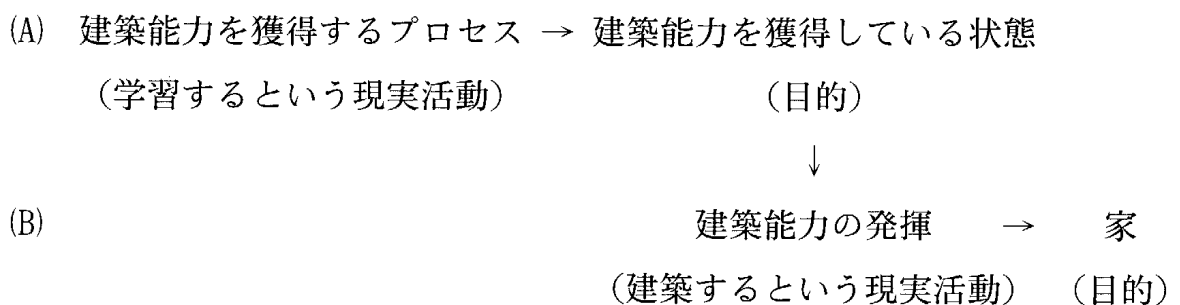
すれば、ソクラテスの強さが身体に関するものであることがはっきりする。では、「成人は子供より先である」というのを「実体において」と限定することによって、何がはっきりするのだろうか。ここで注意しなければならないのは、上の引用で「実体において」が「形相において」の言い換えとして示されている点である。「成人は、彼が十全な仕方でもっている形相の点で子供より先（子供より優先されるもの）である」と言えば、わかりやすいだろう。アリストテレスは、成人と子供のどちらが人間かと問われたら、人間としての機能を十全にもっている成人のほうを優先して人間とみなすだろう。このように見てくると、現実的にあるものは実体において可能的にあるものより先であるというのが、完成体は形相において未完成体より先であるという意味であることが理解されるだろう。

4-2 現実態の実体的優先性(2)——目的論の観点から

次にアリストテレスは目的論の観点から現実態の実体的優先性を説明する。そしてこの説明の中で「エネルゲイア」と「エンテレケイア」との連関が語られることになる。ここでの主要な関心は実体的優先性の意味を明らかにすることであるが、それら二つの語がどの点で異なり、どの点で一致するかという問題にも注意を向けることにしたい。この優先性の説明は以下のように始まっている。

そして生成するものはすべて原理 (*archē*) すなわち目的 (*telos*) に向かって進んでいくのであり（というのもそのためにあるところのそれ〔目的〕は原理であり、生成は目的のためにあるからである）、そしてエネルゲイアが目的であり、デュナミスはそれ〔目的〕のために獲得されるからである。というのも動物は視力をもつために見るのではなく、見るために視力をもつからである。そして同様にまた、人々は建築するために建築能力を、思考するために思考能力をもつからである。(1050a7-12)

ここでアリストテレスは、生成には目的があるという一般的な主張を示した上で、能力の獲得においては現実活動が目的であると述べている。能力の獲得、例えば建築能力の獲得は、その能力をもっていない者が建築家に成るという生成である。そしてその生成の目的は建築するという現実活動である。上の引用で、建築するために建築能力をもつと言われているが、その「もつ」は「手に入れる／獲得する」という意味にとることができる。というのは、エネルギーのためにデュナミスを獲得するということの具体的な説明として、建築するために建築能力をもつと言われているからである。人が建築家になろうと思う理由は通常、建築したいからというものだろう。彼は家を実際に建てることを目的として建築能力を身につけるのである。ここで、建築能力の獲得において目指されるのは建築するという現実活動というよりはむしろ建築能力そのものではないか、という意見が出されるかもしれない。なるほど建築能力の獲得を一つのプロセスと捉えた場合、この獲得プロセスは建築能力を完全に身につけたところで終了する。この意見に対しては、建築すること（能力の発揮としての現実活動）と建築することを学ぶこと（能力の獲得としての現実活動）との違いをはっきりさせることが肝要である。



建築能力そのものが建築能力の獲得の目的なのではないかという意見は、上の図式の(A)に基づいている。この意見を述べる人は(A)における左右の項の関係に注目しているのである。運動とその目的とのそのような関係は(B)にも見られる²⁶⁾。しかしアリストテレスが上の引用で問題にしているのは、(A)と(B)との縦の関係である。(A)の左の項（建築能力の獲得）も右の項（建築能力の保持）も、

(B)の左の項（建築能力の発揮）を目的としているということが主張されているのである。もちろん、(B)の左の項は右の項（家）を目的としているのだから、(A)は結局(B)の右の項を目的としていることになるが、上の引用ではそれは問題にされていない。ともかく、(A)が(B)の左の項を目的としているという仕方で、現実活動としてのエネルゲイアが実体においてデュナミスより先であることが示されるのである。

では、この優先性の意味はどういうことなのか。簡単に言えば、現実活動は能力の獲得ないし保持の目的であるから実体において能力より先である、とアリストテレスは主張している。この主張は、物事はその目的が語られることによって説明されるという目的論に基づいている。つまりアリストテレスは、目的が語られなければ物事は説明されないという目的論の観点において現実活動は能力より先であると言っているのである。実体的優先性をこのように解することはごく自然なことであるが、この場合、「実体においてより先」は「目的論的説明においてより先」ということになり、ここに問題を見出す解釈者がいる。Witt は「目的論的説明においてより先」と解釈することに反対する理由を二つ挙げている²⁷⁾。第一の理由は、そのような解釈を裏づけるテキスト上の根拠がないというものである。これに対して彼女の存在論的優位性の解釈はΔ 11のテキストによって裏づけられている。第二の理由は、『動物部分論』第1巻第1章の一節（640a18-26）で目的論的説明における優先性が説明方式および時間における優先性と結びつけられていることに着目し、「実体においてより先」が他の二つの優先性と区別されているΘ 8に、目的論的説明における優先性を読み込むことはできない、というものである。第一の理由に対しては、アリストテレスの用語の用法は必ずしも他のテキストのどこかで規定されたものである必要はない、と反論することができるだろう。或る用語が他のテキストで規定された用法に合わない仕方で用いられているとき、当該の文脈において通用する新しい用法があるのだと認めることは、一つの解釈の仕方である。Θ 8の当該の「実体においてより先」はそのような用法であり、実際、伝統的解釈はそのように解釈し、目的論的説明における優先性と理解してきたのであ

る。第二の理由に対しては、『動物部分論』の一節の解釈の仕方に問題があることを指摘できる。Witt は目的論的説明における優先性と説明方式および時間における優先性とが結びつけられていると解するが、アリストテレスがそのような結びつけを行っているようには見えない。その一節で言われていることはこうである。(1)生成は〈実体〉のためにある。例えば家はその形相がしかじかであるからそのように生じる。それゆえ、(2)動物の身体の一部は偶然的に形成されたとするエンペドクレスの説明は正しくない。(3)エンペドクレスがこのように説明するのは、身体をしかるべく形成する能力をもつ種子が存在するべきこと、そして説明方式においてだけでなく時間においても生みの親が先に存在したということに彼が気づいていないからである。(1)は目的論的説明における現実態——ここでは〈実体〉が挙げられている——の優先性を示している。(3)は説明方式と時間における現実態の優先性を示すものと一応理解しよう。(1)はエンペドクレスの説明が正しくないことの理由、(3)はエンペドクレスが正しくない説明をすることの理由である。もし彼が説明方式と時間における現実態の優先性に気づいていれば、身体部分の偶然的形成という間違った説明を行うことはなかったはずである。厳密に言えば、この条件節と帰結の間には(1)が付け加えられる必要があるだろう。すなわち、もし彼が説明方式と時間における現実態の優先性に気づいていれば、目的論的説明における現実態の優先性にも気づいただろう、そしてこのことに気づいていれば、彼は間違った説明を行うことはなかったはずである。このように言うとき、説明方式と時間における現実態の優先性と、目的論的説明における現実態の優先性とは区別されている。もちろん Witt のようにそれらを同じものとして結びつけることもできるだろうが、このように結びつけないこともまた可能である。したがって Witt の第二の理由は決定的なものではない²⁸⁾。こうして、 Θ 8 における「実体においてより先」を「目的論的説明においてより先」と解釈する可能性は擁護されるのである。

ところで、アリストテレスはなぜこの優先性を「実体において」という限定によって表現したのだろうか。 Δ 11 の用法を Θ 8 に読み込む解釈についてはこ

れまで見てきたとおりであるが、私は上に示したような目的論的説明における優先性を受け入れるので、そのような読み込みをする解釈とは相容れない。しかしΔ11に示されている言葉遣いには注目したい。アリストテレスはその章において実体的優先性を提示する際、「自然ないし実体において (*kata phusin kai ousian*)」と語っている。この言葉遣いを用いて、「建築するという現実活動は自然において建築能力より先である」と言う、この優先性がアリストテレスの目的論的世界観に基づいたものであることがよくわかる。「建築するという現実活動は自然本来のあり方において建築能力より先である」のであり、その自然本来のあり方とは目的としてのあり方のことである。現実活動が目的であるということはアリストテレス自身が述べていたことである。アリストテレスにとって目的論的説明は、人間による恣意的な説明ではなく、自然の本来的な姿なのである。そして '*ousia*' という語は必ずしもカテゴリーや本質ないし形相を指すわけではなく、Δ11でも用いられているように「自然本性」の意味で用いることも可能なのである²⁹⁾。ともかくこうして、エネルゲイアの目的性からエネルゲイアの実体的優先性が主張される際の「実体において」の用法、さらには目的論がどれほど根深くアリストテレスの思考を支配しているかということが明らかになるのである。

しかしまだ能力としてのデュナミスに対する現実活動としてのエネルゲイアの実体的優先性が示されただけである。広く現実態としてのエネルゲイアもそのような優先性をもつことが示されなければならない。アリストテレスは次に、形相が目的である場合を取り上げ、現実活動が目的である場合とのつながりを示している。

さらに質料は、形相へと (*eis to eidos*) 向かっていくことになっているという理由で、可能的にある。そしてそれ〔質料〕は、現実的にあるとき、形相のうちにある。(1050a15-16)

ここで言われているのは、能力を獲得するものが現実活動を目的とするように

質料は形相を目的とするということである。妨げがない限り形相に向かうことになっている質料が、可能的にあるものとみなされている。このような質料が「現実的にあるとき」というのは、形相と結合したときということであり、このことは質料が「形相のうちにある」という言い方で表されている。実体的優先性についても現実活動の場合と同様に説明できるだろう。例えば可能的にヘルメス（像）である青銅は〈ヘルメス〉という形相を目的とし、これを前提としている。それゆえ、「〈ヘルメス〉は実体ないし自然において、すなわち目的としてのあり方において青銅より先である」と言うことができる。形相は現実活動とは異なる現実態であり、これの実体的優先性が示されることによって、広く現実態に関してその実体的優先性が示されたことになるだろう。

5 結びにかえて——エネルゲイアとエンテレケイアの合一点

最後に、現実態の実体的優先性に関する説明の中で明らかにされる「エネルゲイア」と「エンテレケイア」の意味合いについて考えることにしたい。アリストテレスは形相の目的性を明らかにした後で、再び現実活動の話に戻り、次のように述べている。

そして他のものどもの場合、すなわちその目的が運動であるものどもの場合も同様である。それゆえ、教師たちは〔学ぶ者たちが〕活動しているのを示したときに (*energounta epideixantes*) 〔彼ら学ぶ者たちが〕目的を示した (*to telos apodedōkenai*) 〔目的に到達した〕のだと考えるのである。(1050a16-19)

例えば建築することを学ぶ者は、初めて完全な仕方で建築したときに、目的に到達したと判定される。時間的優先性について論じた際に見たように、運動には不完全なものと完全なものがある。上の引用で目的達成のしるしとされているのは、初めてなされる完全な運動である。不完全な運動が一定の時間続いた

後で完全な運動が生じるのだが、この完全な運動と同時に目的が達成されるのである。4－2において、「建築するという現実活動は自然本来のあり方において建築能力より先である」と述べたが、その場合の現実活動は完全な運動であり、このような運動が現実を示されたとき、目的が達成されたことがわかるのである。

アリストテレスは目的としての現実活動に関するこの説明から、「エネルゲイア」と「エンテレケイア」との連関の説明へと移っていく。

実際その働き (*ergon*) は目的 (*telos*) であり、そのエネルゲイアは働きであり、それゆえにまた「エネルゲイア」という語は「働き」に即して語られ、「エンテレケイア」へと導くのである。(1050a21-23)

建築の例で言うと、完全な仕方で建築するという現実活動は建築家の働きであり、またこの働きは建築家あるいは建築家に成りつつある者にとっての目的である（4－2の図式(A)(B)を参照）。そういうわけで、「エネルゲイア (*energeia*)」という語は「働き (*ergon*)」という語を構成要素としてもっているものであり、また「目的」としての「働き」を構成要素にもつ「エネルゲイア」をわれわれは（今度は「目的」の意味がはっきりするように）「エンテレケイア (*entelecheia*)」——これは「完全さをもっている (*enteles echein*)」あるいは「完全である (*entelōs echein*)」という含蓄をもっている³⁰⁾——とも表現するのである（なぜなら完全であるとは目的に達していることであるから）。上の引用によれば、「エネルゲイア」も「エンテレケイア」も「目的」概念を基軸としている。「エネルゲイア」はその語の組成を考えるよりも「エネルゲイン」という動詞との関連を指摘したほうがよいだろう。上の引用では、エネルゲインすなわち現実活動——これは見方によっては「働き」とも言える——が目的だと言われているのである。また「エンテレケイア」はその語源からも明らかなように、完全であること、すなわち目的に達していることを示す語である。先の図式(A)(B)において、建築能力の発揮としてのエネルゲイアは、建築

能力を獲得すること、あるいは所持することにとっての目的であった。しかし建築能力の発揮にはさらに家という目的——目的であるから家の形相すなわち「〈家〉」と言うべきだが——があった。したがってその図式においては〈家〉こそが「エンテレケイア」と呼ばれるべきものである。ここでの理屈では、建築能力の発揮が「エネルゲイア」、その目的である〈家〉が「エンテレケイア」と呼ばれるべきだということになる。しかしアリストテレスは目的としての〈家〉をしばしば「エネルゲイア」と呼ぶ³¹⁾。また建築能力の発揮としての運動を「(不完全な) エンテレケイア」と呼ぶこともある³²⁾。要するにアリストテレスは、「エネルゲイア」と「エンテレケイア」の意味合いに違いがあることを認めつつも、両者が「目的」を基軸にする用語であることから、両者を互換的に用いているのである。そしてこのことは、建築能力の発揮といった運動ではなく、見る能力の発揮といった行為の場合によりはっきりと確認される。見る能力の発揮としての行為はエネルゲイアである。そしてその行為はそれ自体が目的であるような完全な行為であるので、エンテレケイアでもある。つまり行為の場合には、エネルゲイアとエンテレケイアが完全に合致するのである。アリストテレスは上の引用の後で運動と行為との違いに言及している(1050a23-1050b2)が、それはこの合致にわれわれの目を向けようとしたことの表れであると言うこともできるだろう。現実態の実体的優先性の説明においてこのように「エネルゲイア」と「エンテレケイア」の意味合いの相違点と共通点が見えてきたことは、現実態優先論の一つの有益な結果として受け止めることができるだろう。

以上の考察によって、Θ 8 の現実態優先論における目的論の意義が明らかになったのではないかと思う。これに続いてΘ 卷第 9 章の解釈を行えば、「現実態」概念の意義はより明確なものとなるだろう。さらにΘ 卷第 10 章における真としての〈あるもの〉の考察にまで進めば、Θ 卷全体の意義を見定めることも可能となるだろう。しかしこれらについては今後の課題とすることにしたい。

注

- 1) これについては、拙稿「能力と可能態——アリストテレス『形而上学』Θ巻における「デュナミス」の用法——」，立正大学文学部『論叢』121，2005，pp. 79-81において、「可能態」という語の適用範囲の広さとともに言及しておいた。「現実態」という語は「建築する」といった運動，「見る」といった行為，そして形相にまで適用される。
- 2) Δ巻第11章における「実体においてより先」の用法をΘ巻第8章に読み込もうとする C. Witt, 'The Priority of Actuality in Aristotle', in T. Scaltsas, D. Charles and M. L. Gill, eds., *Unity, Identity, and Explanation in Aristotle's Metaphysics*, Oxford University Press, Oxford, 1994, pp.215-228に始まり，C. Y. Panayides, 'Aristotle on the Priority of Actuality in Substance', *Ancient Philosophy* 19, 1999, pp.327-344, C. Witt, *Ways of Being: Potentiality and Actuality in Aristotle's Metaphysics*, Cornell University Press, Ithaca, 2003, pp.75-96 (第4章，Witt, 1994の加筆修正版)，S. Makin, 'What Does Aristotle Mean by Priority in Substance?', *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 24, 2003, p.209-238と続いている。
- 3) ほとんどの解釈者が認めるように，アリストテレスはしばしば「エネルゲイア」と「エンテレケイア」を区別なく互換的に用いる。しかしΘ巻では「現実態」概念自体が主題となっていることもあって，二つの語がもつ意味合いの違いが示唆される箇所もある（Θ3, 1047a30-32, Θ8, 1050a21-23）。この問題は本稿の5で取り上げる。
- 4) 説明方式 (*logos*) における優先性と時間における優先性については理解にそれほど困難はないが，実体における優先性については注2) のように論争がある。時間における優先性の説明は実体における優先性の説明を理解するのに有益であるので，省略せずに取り上げることにする。説明方式における優先性について説明しておくと，例えば建築しうるもの (*oikodomikon*) は，「建築する能力のあるもの (*to dunamenon oikodomein*)」と説明され，説明上，「建築する」というエネルゲイアが前提されている。それゆえエネルゲイアは説明方式においてデュナトン（能力のあるもの）より先であると言われるのである。そしてアリストテレスはデュナトンについて言えることはデュナミスについても言えると考えるので，エネルゲイアは説明方式においてデュナミスより先であることになる。
- 5) Δ11では「実体においてより先」は存在論的優位性を示す用法として示されている。存在論的優位性とは，「Aが実体においてBより先である」場合に，「AはBなしに存在できるが，BはAなしに存在できない」ということである。

- 6) 能力としてのデュナミスについては、拙稿、2005, pp.75-77で論じた。
- 7) アリストテレスは、目的に向かっていくプロセスとしての運動（例えば建築すること）と、それ自体が目的であるような行為（*praxis*）（例えば見ること）とを区別している（Θ6, 1048b18-35, cf. Θ8, 1050a23-b2）。1048b18-35では、「エネルゲイア」は後者のために用いられ、「運動」と「エネルゲイア」とが異なることが示されている。しかし「エネルゲイア」は一般に「運動」の意味で用いられ（Θ3, 1047a32）、アリストテレス自身しばしば「エネルゲイア」をそのような意味で用いている。
- 8) アリストテレスは時間的優先性の説明の最後でエネルゲイアの優先性のみに言及している。またΘ8の冒頭部でも最後のまとめの部分でもエネルゲイアの優先性を一般的に主張している。これらのことはアリストテレスの主眼がエネルゲイアの時間的優先性の主張にあることを示していると考えられる。
- 9) 注7)で区別した「運動」と「行為」とをまとめて表すのに「現実活動」という言葉を用いることにする。
- 10) 「エネルゲイア」は広義に現実態を表すこともあれば、運動や行為を表すこともある。すでに見たように、「エネルゲイアはデュナミスより先である」と言われる際の「エネルゲイア」は広義の用法である。問題は「エネルゲイア」が動詞 '*energein*' として用いられる場合である。その場合は「活動する」というように、運動や行為が表される場合が多い。Θ8では '*energēsai*' (1049b13), '*energounta*' (1050a18) がそうである。しかし引用中の現在分詞 '*energoun*' は「活動しているもの」ではなく「現実的なもの」と解するべきである。さもなければ、後で挙げられる例（現実的な人間など）と合わなくなる。W. D. Ross, *Aristotle's Metaphysics: A Revised Text with Introduction and Commentary*, II, Oxford University Press, Oxford, 1924, p.258も引用箇所について、「種の現実的な成員は可能的な成員よりも時間においてより先である」と説明している。
- 11) M. F. Burnyeat, et al., *Notes on Books Eta and Theta of Aristotle's Metaphysics*, Study Aids in Philosophy, Oxford, 1984, p.139.
- 12) 目が形成された胎児は胎内で光を感じることができる。アリストテレスはおそらく、光を感じるという意味で「見る」と言っているのではないだろう。
- 13) 注4)の終わりでも述べたように、アリストテレスはデュナトンについて言えることはデュナミスについても言えると考えている。
- 14) 「見るもの」は、見うるもの（胎児の目）の生成の原因である親（現実的に見るもの）を指すものとする。
- 15) 注13)に示したことと同様である。

- 16) 数的観点においても生成が問題になっているのだから、種的観点のみ生成論の観点というのは奇妙に聞こえるかもしれない。しかし数的観点においては、生むものが考慮に入っておらず、完全な意味での生成論の観点とは異なるというべきである。
- 17) Burnyeat, et al., 1984, pp.139-140はこの「それゆえ」を、「エネルゲイアは時間においてデュナミスより先である」という一般的な主張を承けたものと解するが、私は直前の内容を承けたものと解したい。直前の内容とこの引用部分との微妙な関係については、後で述べる。注19)を参照。
- 18) キタラの演奏技術を学ぶことは運動であるが、キタラの演奏が運動であるかどうかは問題である。運動は目的に向かうプロセスであり、目的に到達したら終わる。アリストテレスは運動の例として痩身、学習、歩行、建築を挙げている(1048b29-30)。これらの目的はそれぞれ、痩せた身体、技術や能力、目的地、家であり、目的が果たされたらそれらの運動は終わる。これに対して「見る」といった行為はそのエネルゲイア自体が目的であり、「見ると同時に見てしまった」(1048b23)と特徴づけられるような行為である。キタラの演奏は何らかの目的を達成するための運動だろうか。むしろ弾くこと自体、そしてその演奏が聴かれること自体が目的であるように思われる。「聴く」というのが「見る」と同様の行為であることは明らかであるが、演奏がそのような行為であるかどうかについてははっきりと述べられていない。そこで運動にも行為にも用いられる「現実活動」という語を選んだ。
- 19) 数的観点からの見るものの説明は、キタラを弾くというような技術的な能力の場合には、能力の獲得の話へとつながっていく。数的観点においては、自然的な能力の説明を技術的な能力にあてはめようとする、能力の獲得が自ずと問題になるのである。引用部分の「それゆえ」はこうしたつながりを不器用に示すものだと私は解する。
- 20) 注16)を参照。
- 21) 「実体的優先性」は「実体における優先性」と同じ意味とする。
- 22) Ross, 1924, p.265. 存在論的優位性については、注5)を参照。
- 23) Witt, 2003, pp.84-85 (Witt, 1994, pp.223-224) は子供と成人の例の解釈を工夫することによって(注25)を参照)、また Makin, 2003は $\Delta 11$ における「実体においてより先」(存在論的優位性)について 'a more nuanced understanding' (p.212)を行い(pp.212-224), Wittとも異なる仕方で子供と成人の例を解釈することによって、 $\Theta 8$ における実体的優先性を存在論的優位性と解釈しようと試みている。

- 24) この「第一に」は、永遠的なものと消滅的なものに関する説明に対して言われている。
- 25) Witt, 2003, p.85はこの奇妙さを避けるために、成人を当の子供の成長体とは考えず、種としての成人（人間）と解する。彼女は Panayides, 1999の反論に応える際に、「一方は形相をすでに〔十全な仕方で〕もっている」という部分を取り上げ、その子供が存在する時点ですでに形相をもっている成人は当の子供の成長体ではありえないという事実を指摘している（pp.139-140, n.7）。この事実によって、「すでに形相をもっている」と言われる成人は人間種としての成人であると考えるのである。しかしアリストテレスはその前に、生成においてより後であるものが実体においてはより先だと述べている（1050a4-5）。Witt の解釈に従うなら、この「生成においてより後であるもの」は「生成においてより後であるものが帰属している種」でなければならない。しかしその部分には、「種において」などの限定はない。したがってやはりアリストテレスは、子供とその成長体を問題にしているのだと考えられる。またこのように考える解釈にとって、Witt の言う「すでに」の問題は致命的なものではないだろう。というのも子供とその成長体に関して、前者はまだ形相を完全にはもっていないが、後者はすでに形相を完全にもっていると言う場合に、その子供が存在する時点にわれわれの視点を固定する必要はないからである。アリストテレスは形相の有無について語るとき、子供が存在する時点とその成長体が存在する時点との間で視点を行き来させているのだと考えればよいのである。
- 26) 建築するという現実活動に家という目的があることは、1050a23-1050b 2 において、見るといった行為がそれ自体として目的であることとの対比で説明される。注7）を参照。
- 27) Witt, 1994, pp.219-220. Witt, 2003, pp.87-88では三つに増やされる。追加されたものは第二の理由として示されている。それは、実体的優先性の説明の前半部では「実体においてより先」を目的論的説明における優先性と解し、後半部ではそれを存在論的優位性と解すると、 Θ 8 内部の一貫性が損なわれてしまう、というものである。これに対しては、用法の一貫性を要求することこそ問題だと切り返すことができる。また実体的優先性の後半部の説明が「いっそう厳密な意味で」（1050b6）という言葉で始まっていることはむしろ用法の変化を示唆していると言える。
- 28) Witt, 2003では『動物部分論』のこの一節の引用が削除されている。しかし Witt, 1994の第二の理由は Witt, 2003においてもそのまま——第二から第三に移されてはいるが——残されている。

- 29) $\Delta 11$ において「自然」と言われる場合とは文脈が異なることに注意する必要がある。 $\Delta 11$ では、そこに述べられているように、プラトンが用いた実体的優先性が問題にされており、それゆえにその優先性は存在論的優位性として示されたのである。
- 30) 「エンテレケイア」の語源については諸説ある。これについては D. W. Graham, 'The Etymology of *Entelecheia*', *American Journal of Philology* 110, 1989, pp.73-80を参照。ここでは語源の詮索は行わず、Graham が最も尊重すべきだとする伝統的な解釈を採用した。Graham に応答する G. A. Blair, 'Aristotle on *Entelecheia*: A Reply to Daniel Graham', *American Journal of Philology* 114, 1993, pp.91-97は、「内部に (*en*) 目的 (*telos*) をもっている (*echein*)」という解釈を提示している。この解釈は見るといった行為によく適合するので、これもまた魅力的である。
- 31) Z H 巻の実体論において形相は最終的に「エネルゲイア」と呼ばれるようになった。もちろん「エンテレケイア」という語も混在して用いられている。
- 32) 『自然学』第3巻第1章における「運動」の定義は、「可能的にあるものの、可能的にあるものとしての限りにおけるエンテレケイア」である。これは、形容矛盾だという指摘を受けるかもしれないが、「不完全なエンテレケイア」と呼ばれるべきものである。アリストテレスはこれによって、目的を目指して進行しているプロセスを言い表そうとしているのだと考えられる。

(2005年11月9日受理, 11月16日採択)